

平成28年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属池田中学校

1 附属池田中学校の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2) 所在地

大阪府池田市緑丘1-5-1

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員480人(1学級40人)

(4) 幼児・児童・生徒数

482人(男子241人・女子241人)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人, 副校長 1人, 主幹教諭 1人, 教諭 20人(うち, 臨時的雇用2人, 育児休業4人), 非常勤講師 6人
事務職員 6人(専任2人, 事務補佐員1人, 臨時的事務員3人), 臨時的用務員2人

2 附属池田中学校の特徴

安全教育に取り組み, インターナショナルセーフスクール(ISS), セーフティプロモーションスクール(SPS)の認証を受けている。

グローバル化した社会で活躍できる人材を育てるため, 豊かなコミュニケーション能力と異文化への理解, 自ら課題を発見し, 解決する能力の育成に取り組んできた。現在は本校の教育理念に通ずるところの多い国際バカロレア教育のプログラムを研究し, その成果を教育委員会や公立諸学校等に還元, 普及することを目指している。

3 附属池田中学校の役割

- (1) 教員養成大学である大阪教育大学の研究校である。
- (2) 大阪教育大学の学生の教育実習校である。
- (3) 現職教育への奉仕をする学校である。
- (4) 常に新しい教育理念と中正な教育的信念をもち, 望ましい環境の内に個性を生かしながら, 真の中等普通教育を実施することを目指している。
- (5) 一般生徒, 国際枠生徒(帰国生徒, 在日学国籍生徒), 学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行い, 新しい教育の開発を目指している。

4 附属池田学校の学校教育目標

人権尊重の精神を基に, 自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い, 激しく変化する社会に主体的に対応し, 国際社会に貢献できる, 生きる力に満ちた生徒の育成

5 附属池田中学校の学校教育計画

(1)共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」の推進および各自の研究力の向上

- ◎学習指導要領改訂を踏まえた、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を意識した共同研究の推進
- ◎各教科・領域における評価(評価基準・評価規準)研究及び積極的な研究の継続・推進
- ◎国際バカロレア(IB)教育の推進及び研究

(2)授業力の向上

- ◎質の高い授業研究・研究協議会の充実
- ◎言語活動の充実, 学校図書館・ICTの活用, 生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

(3)安全・安心な学校づくり

- ◎ISS校, SPS校としての取組の充実と国内外への発信
- ◎安全教育カリキュラムの確立
- ◎安全管理の見直し・充実

(4)自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進

- ◎自己肯定感を育み, 互いを尊重しあう人間関係の育成
- ◎異なる文化や価値観を認め合い, 自他ともに大切にする態度の育成

(5)生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導, 規範意識の向上と生活規律, 学習規律の徹底, いじめや不登校への対応

- ◎生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施
- ◎生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり
- ◎いじめ・不登校のない学校づくり (6)教育実習の充実
- ◎教職を望む学生の資質の向上

(7)適切な組織運営, 開かれた学校づくり, 保護者・地域との連携

- ◎機能的・機動的な組織運営
- ◎開かれた学校づくりの推進
- ◎学校評価の充実
- ◎保護者・地域との連携

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	1. 共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」の推進および各自の研究力の向上	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)学習指導要領改訂を踏まえた、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を意図した共同研究の推進	各教科において、小学校・高校と連携を図り、カリキュラムづくり・授業づくり・評価研究を行う。また、研究協議会の充実を図る。	今年度は池田地区の研究テーマが新しく変わったこともあり、小中高合同教科部会場で議論する内容を研究部から細かく出していたこともあって、各教科における「つなぐ力」が明確になった。	「つなぐ力」というテーマのもとに議論していたのだが、小・高がIBを意識しすぎてしまい、上手く連携がとれていなかった教科もあった。あくまでも池田地区の研究テーマにそって研究を行っていることを、教科部会で中学校側が伝えていく必要がある。	B	一部連携が不十分であったところが見受けられるが、小中高の真ん中に位置する中学校が上手にリードしていた。教科ごとに子どもにつける力が見えるようになってきている。	A	次年度は共通のテーマの下で、研究会は校種別に開催することで、それぞれの校種独自の課題にも迫ることができるようになる。
(2)各教科・領域における評価研究及び積極的な研究の継続・推進及び国際バカロレア(IB)教育の検討及び研究	①科学研究費助成事業(奨励研究)に10人以上応募し、30%以上の採択率を達成する。また、研修報告会を活性化し、学びの共有化を図る。 ②国際バカロレア(IB)教育について、全教員が共通認識をもちながら理解を深め、実践する。	・科研の応募については、今年度は6人で目標人数を下回った。採択率に関しては、今年度の募集に関してはまだ結果が出ていないが、昨年度は20%で、一昨年度の17%からわずかながら微増している。 ・研修報告については、1学期に数件報告が行われて以降、滞ってしまっている。	・科研の応募の時期が、研究会などの忙しい時期と重なってしまい、なかなか手が回らないのが現状である。もう少し早めに声かけを行ったりすることが必要である。 ・他校の研究会に参加し、それを報告することで、他の教師の研究を促すきっかけにもなるので、研修報告をも少し充実させたい。	C	多忙な中での科研費助成事業への取り組みには解決しなければならない課題が多々ある。応募に関する目標値の見直しなど、できる範囲での取り組みをすればよい。	B	研究助成、研修報告については中堅教員にとっては意欲につながる面もあるため、管理職、研究部、経験者が助言しながら適切に進めたい。
		今年度は夏の研修で、IBの講師を招いてのワークショップを行い、全教師にIBに対する理解を深めることができた。また生徒に対しても意識を高められるよう、教室にIBについての掲示などを行った。	ワークショップを行ったことで、IBの理念などを理解できたので、今後これを授業に取り入れていくことが重要である。また次期学習指導要領が目指すべきことも共通する部分があるので、それを念頭において取り組んでいく。	A	国際バカロレア教育のワークショップを取り入れ、教員の意識を高める工夫をするなど、研究推進に真摯に取り組み、一定の成果を上げている。	A	次年度はより一層国際バカロレア教育の理念に基づいた授業研修会を持つと同時に、各地から先進校の講師を招いて実践的な講話を聞く機会を持つ。

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	2. 授業力の向上	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)各教科・領域の本質となる「つなぐ力」を鍛える授業の実践	授業研究会を精選し、「主体的・協働的な学び」をテーマにした研究授業・研究協議を行うことで、授業研究会の質を高める。	ほぼ全員の教師が研究授業を行うことができた。また今年度より、指導案とIBのユニットプランナーを作成し、協議会では授業に内容と、ユニットプランナーの2点について検討を行った。特にユニットプランナーの検討では、授業者だけでなく、他の教師の学びにもなった。	授業内容やユニットプランナーの検討について、他教科からの視点や考えも今後の参考になるので、もっと多くの教師が発言できるように、協議会を進めていこうしていきたい。	B	国際バカロレア教育を意識した指導案の作成や、他教科からの視点を入れた、全教員による研究授業等、学校を上げて積極的な授業研究が行われている。	A	次年度の研究発表会は中学校単独で開催するため、校内での指導案検討や授業見学の機会をより多く持つ。
(2)生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり	ICTを活用した工夫ある授業を展開し、生徒の学校評価アンケートから、90%以上の生徒に授業に関して満足感をもたせる。	学校評価アンケートより、生徒の満足度が高いことがうかがえる。今後もICT機器を活用していくことにより、生徒により一層興味を持てるような授業を心掛けた。	生徒が気軽にICT機器を使用できるようになったが、その分、機器の扱い方などに少雑になってきているように感じる。使用のモラルや扱い方など、今一度生徒にこれらのことについて、確認する必要がある。	B	ICT教育については生徒の満足度が高く、成果を上げている。一方で、生徒に機器使用の慣れが出てきている様子なので、わくわく感があるような活用方法を工夫されたい。	B	一部の授業でICT関連企業との共同実証研究を行うことが予定されている。生徒につけたい力を効果的に発揮できるソフトの利用を進めると同時に、生徒には高いモラルを折に触れて求める。

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	3. 安全・安心な学校づくり	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)ISS校、SPS校としての取組の充実と国内外への発信	生徒会・保護者等と連携した組織的な学校安全の取組をさらに推進するとともに、国内外にその取組を発信する。	PTA安全委員会の立ち当番の参加率向上や、保護者向け救急救命講習の実施など、保護者との連携をはかり、学校安全の推進を行うことが出来た。また、金童小学校主催のSPS推進員養成セミナーでの講演などを通じて学校安全の発信をはかることができた。	保護者向けの講習については、参加者の意識の向上や参加率の向上、実際に行動できる人物の育成を目指し、携帯型の人工呼吸用フェイスシールドを配布するなど、改善を行った。	B	引き続き、地元の公立校や全国の学校の模範となるよう、取り組み・連携を続けてもらいたい。	A	継続したより質の高い取組を行いその効果と課題を検証するとともに積極的に発信していく。
(2)安全管理の推進及び安全教育の見直し、充実	学校安全マニュアルを改訂し、実際に即した2回以上の防犯訓練、防災訓練の実施と評価の充実を図る。また、安全教育の系統的なカリキュラム化を図る。	学校安全マニュアルを改訂を実施することができた。しかし、再度改訂すべき点も年度内に生じてきており、次年度新たに改訂を行いたい。訓練については、年2回それぞれ実施することができた。カリキュラムに関しては、カリキュラム化を目指した、改善等をはかったが、確立したカリキュラムとしては完成していないので、次年度に向けて取り組みたい。	訓練については、昨年度の反省点をふまえて、現時点での職員の状況に即したものを実施することができた。また、カリキュラム化については、生徒手帳に安全教育の内容を活用して、年度当初の学級開きの時期に安全やマナーに関する指導や地区ごとの集団下校体勢の整備をとって有事に対する意識の向上などを図った。	B	マニュアル改訂や訓練を通して、安全に対する職員の意識が高まっており、子どもたちの安全につながっていることが推察できる。	B	南海トラフ地震を含め安全学習の系統的なカリキュラムをさらに進める。

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	4. 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1)自己肯定感を育み、互いを尊重しあう人間関係の育成	①生徒の学校評価アンケートから、90%以上の生徒に学校生活に関して満足感をもたせる。また、学級や学年の活動の場において、他者と関わり、互いの考えを交流したりする場面ができる限り設ける。	項目1の「楽しい学校生活を送れている。」では95%以上の生徒が「よく当てはまる」「やや当てはまる」と答えており、昨年と同様に高水準を保っており、学校生活を送れていると考える。一方、項目15の「附中は、細かい校則はないが、生徒はルールをよく守っている。」では「よく当てはまる」「やや当てはまる」が66.6%と昨年度よりは向上したが90%を下回っている。一方で、「自分の考えをまとめたり、話し合ったり、発表する授業がよくある。」の問いでは69%が「よく当てはまる」と、22.6%が「やや当てはまる」と答えている。また、電子黒板やコンピュータを利用するなど、教員にいろいろ工夫している先生が多い。」の問いでは55.5%が「よく当てはまる」と、36.1%が「やや当てはまる」と答えており、高い水準となっている。	昨年度より継続して多くの生徒は楽しく充実した学校生活を送ることはできており、また少しずつではあるがルール違反なども改善傾向にはある。まじめにルールを遵守している生徒に不満や不信感を抱かせないためにも、教師の共通理解の徹底は不可欠である。より充実した学校生活を送るうえでルールを守ることは重要である。また、学校が安心して生活できる場であること、生徒どうしが安心して発言し、議論できる場であり続けることも大切になりたい。生徒には折に触れて「思いやりの心」を意識させており、これを継続しながら、加えてルールを遵守することの大切さを実感できる様な取り組みを続ける必要がある。多くの生徒が積極的に授業に参加し、高め合う活動を行っている。今後も継続していけるよう、定期的な研修会を続けていくべきである。	B	アンケート結果からは生徒が学校生活を楽しんでくれていると認識できる。ルールを守ることについては、生徒会から生徒に問題提起をすることで、ともに考えていく場面設定が必要と考える。また、思いやりの心は相互理解を築く大切な基盤である。相手の立場に立つて考えることの重要性を教えてもらいたい。	B	生徒主体の取り組みを、生徒会活動とクラスの連携を基盤とした組織的なものとしてさらなる推進を図る。生徒の活動には目的意識をしっかりと根付かせ、その目的意識の結果として達成感が持てるように指導する。

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	4. 自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(2)異なる文化や価値観を認め合い、自他ともに大切にすることを態度の育成	①生徒の学校評価アンケートから85%以上の生徒に国際性に関する経験が活かされていると実感をもたせ、また、国際理解の場の充実を図る。	80%を超える生徒が国際性に関する経験が活かされていると実感をもたせ、目標である85%にはわずかに届かなかった。	国際性に関する発信の場を現在よりも増やす。具体的には、舞台発表だけでなく、壁新聞や国際性新聞等の紙面での発信を行う。	C	国際性に関する発信の場を現在よりも増やす。具体的には、舞台発表だけでなく、壁新聞や国際性新聞等の紙面での発信を行う。	C	国際バカロレア教育の推進とともに国際性に関する発信の場を増やす。	国際
	②真の自主・自律の確立、他者理解を深め、人としての誇りがもてる道徳教育を計画的・組織的に推進する。	「『道徳の時間』は、人としての生き方を考える上で有効な時間になっている。」の問いに21.3%が「よく当てはまる」、34.8%が「やや当てはまる」と答えており、満足できる水準には至っていない。	・読み物教材ばかりではなく、ICT機器を活用した授業実践をより一層多く行う。 ・同じ担当者が準備し同じ授業者が実践するばかりでなく、ローテーションで授業を計画し、様々な視点を取り入れていくことも検討したい。	D	道徳の教科化に伴い、多忙の中で年間指導計画や指導方法の見直し及び評価が新たに入ってくるため、授業に工夫を凝らしてもらいたい。	C	道徳推進教師に頼りすぎず、学年会の場などを利用して、各学年で道徳の授業について検討する機会を持つ。	道徳

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	5. 生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導、規範意識の向上と生活規律、学習規律の徹底、いじめや不登校への対応	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施	生徒の学校評価アンケートから、85%以上の生徒に教員の生徒理解に関して満足感をもたせ、体罰を感じる項目については5%以下にする。また、共通認識・共通実践および保護者・関係諸機関と連携を図った対応を図る。	今年度は担任2名の途中交代など、学級経営に厳しい状況が生じ、これに対して、教育相談を実施するなど様々な策を講じたが、生徒理解の項目については前年度よりも低下が見られ、達成することができなかった。体罰を感じる項目については、前年度よりも低下させることができたが、目標の5%には届かなかった。	教育相談の年二回の実施。部活指導に対する意識向上に向けた働きかけをする。	D	年度途中の担任の交代が出たことは、対応に苦慮したことがうかがえる。すべての生徒が抱える問題に適切に対応することは難しいと思うが、地道な取り組みを続けてもらいたい。	C	アンケートの継続した実施と分析、人間関係づくりの取組等、積極的な生徒指導の推進を図る。	生徒指導
(2)生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり	生徒指導委員会を軸に情報の共有化を図り、共通した指導を実践するとともに、生徒のリーダー性・自発性を育むように生徒会の活性化を図る。	生徒指導委員会を最低2週間に1回の間隔で実施し、校内で起こっている事象の情報共有を綿密に図ることができた。また、リーダーの育成については後期生徒会の立候補者が多数出るなどリーダー性、自発性の育成・生徒会の活性化を図ることができた。	校外学習などを通して、自己指導力の育成を目指した。自己決定の場や活動の場を設けて生徒の育成を図る。	B	リーダーの育成に尽力していることは評価できるが、生徒指導委員会が事実の共有をしていることが、学校全体にどれだけ共有する場があるかが課題であると感ずる。	B	教員間での生徒情報の共有、意思疎通を意識して心がける。学年ごとの生徒の発達段階に応じた指導観を明らかにする。	生徒指導 (生徒会を含む)
(3)いじめ・不登校のない学校づくり	いじめ等のアンケートを活用し、集団を評価、向上させる。また、「特別支援委員会」を充実させ、課題のある生徒の「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を作成する。	・アンケートを通して集団を把握するようつとめた。今年度はQ-Uの意味あいや効果などの啓発を職員にはかった。実施に向けた予算の調整等を行ったので、次年度再提案を行い、実施の方向で働きかけを行いたい。 ・「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を作成した。	・教育雑誌の回覧をとおした職員への啓発。事務との予算執行の相談をする。 ・「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」は、1学期の作成を目指し、有効に活用できるものにする。	B	Q-Uの早期実施が期待される。いじめに苦しむ生徒が一人たりとも出ないよう、生徒指導に当たってもらいたい。	B	安全・安心な学校づくりを生徒が意識して取り組んでいけるよう支援していく。	生徒指導・メンタル

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	6. 教育実習の充実	

(1)教職を望む学生の資質の向上	教科指導や学級指導において指導教員を中心に個々の教育実習生の課題を把握し、各教科・実習部・管理職・大学と協力体制をとる。	教務課免許・実習係と連絡を密に取り、学生の実態把握やこちらで抱えた学生の様子で報告すべき事項に関して共有ができた。	留学生の実習生や事前指導段階で実習の完遂が難しいと判断される学生の対応について、大学側に報告を行い、次年度以降の対応について協議を行うことにしている。	B	毎年、本来業務と平行して多くの実習生を受け入れ、真摯に指導していることに敬意を表する。	A	計画的な教育実習生指導が行えるよう教育実習主任を中心に学校組織として取り組んでいく。	教育実習
------------------	--	---	---	---	---	---	--	------

学校教育目標	人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	7. 適切な組織運営、開かれた学校づくり、保護者・地域との連携	

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)機能的・機動的な組織運営	①保護者の学校評価アンケートで90%以上の保護者が教育方針等に対して満足感をもつような学校運営をする。	「子どもの様子についてきめ細かく保護者に連絡」「進路に関する情報提供」の項目で、満足度において70%を下回る結果となっており、昨年よりもポイントが低くなっている。その他では90%に近い数値で満足を得られる学校運営となっている。	個別の電話による連絡、学級・学年通信、ホームページなど、月1回以上は様々な方法で状況を伝える。進路に関する情報は年1回の「進路説明会」と3年対象の「進路講話」(2回)に参加しやすいようにアナウンスするとともに、説明内容をできる限り詳しく改善する。	C	情報提供について充足感を得ていない保護者が毎年少なからずいることが課題。改善点に上げられている方法が効果を上げることを期待する。	C	ホームページや保護者説明会等で学校の方針や取組、課題や依頼事項について積極的に情報発信する。また、提供できる情報とできない情報(個人情報に関することなど)があることについても理解を図る。	運営・教務
	②ミドルリーダーが各分掌においてリーダーシップを発揮し、学校組織として報告・連絡・相談の機能を充実させる。	学年・各分掌の主任がそれぞれにリーダーシップを発揮し、生徒の指導や教育上の諸問題に当たることができた。管理職への報告・連絡・相談も適切に行われ、組織として課題解決することができた。一方で、体調を崩す教員が複数出た。	前年度の内容を踏襲するばかりではなく、効率化できる部分を探りつつ、教員の身の健康面にもしっかりと目を向ける必要がある。	C	4~50代の教員が少なく、2~30代が学校をリードしなくてはならないのは全国的な傾向であるが、複数名が体調を崩してしまっただけの不安が感じられる。	C	教員間のコミュニケーションを大切にし、一人で悩みを抱え込まずにすむ環境を作る。	運営・教務
(2)開かれた学校づくりの推進	学習評価等の規準や進路情報、公文書等を適切に発信する。また、学校HPのリニューアルを行い、より積極的、よりわかりやすい学校情報(学校評価を含む)を発信する。	「評価説明会」を年度初めに行い、わかりやすい透明な評価を生徒や保護者に伝えるよう掛けた。また進路指導主任や学級担任とも連携しながら、適切な進路指導を行った。 ・学校HPを随時更新し、学校情報を発信できた。	・シラバスの書式の統一を図る。 ・学校HPのさらなる拡充を図る。 ・テスト欠席者と長期不登校生徒の見込みのつけ方を考え直す必要がある。相対評価と学校内絶対評価での実力テストのつけ方を学校で統一する必要がある。	B	概ね良好に運営していると思われるが、評価については保護者も生徒も敏感であり、説明責任が強く求められるだけに、慎重に検討することが肝要である。	B	ホームページの充実等、積極的な情報発信に努める。説明を求められた場合は真摯に時間をかけて対応する。	教務・進路
(3)保護者・地域との連携	①保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者が授業参観や学校行事等に参加しやすいと感じるようになる。	・保護者のアンケートにおいて「授業や行事に参観したり、懇談する機会を設け、保護者は参加しやすい」という項目で、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の回答が90%以上となった。	・さらに内容を充実させて、参加してよかったと感じられる授業・行事を企画していく。	B	高い達成度を実現している。今後の継続を期待する。学校にあまり足を運ばない保護者に対しても日頃から丁寧な対応をしてもらいたい。	A	行事参加の意義等を伝えながらさらに取組を充実させていく。	教務・PTA
	②PTA活動が活発になるよう学校として支援を行う。(保護者の学校評価アンケートにおいて、90%以上の保護者がPTA活動に対し満足度をもつ)	・保護者のアンケートにおいて「附中のPTA活動は活発である」という項目で、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の回答が90%以上となった。	・教員もPTAの一員として、PTA活動への参加率を高める。	B	PTA活動が活発であることが認められるが、今後は教員の参加が増えることを期待する。	B	教員のPTA活動の参加をはたらきかける。PTA活動についての情報を教員にも積極的に発信する。	教務・PTA